北條民雄

ロマン派の作家等の物語は環境描写が寧ろ生命である。自然主義の作家等の物語は性格描写と問題提起とが主たる特色をなしてゐる。バルザックは環境より及ぼして中心人物を併せて描写するのである。彼こそは浪漫派と現実派との両界に跨る一大巨柱であり、反抗と統制と、情熱と理智とを併せ有する巨人である。浪漫主義の流れは悉く彼の中に包容せられ、現実主義は彼によつて大地から発生したるが如き自然の力を発揮してゐるのである。

バルザックは千七百九十九年に生れ、千八百二十八年、二十九才にして著作を初め、千八百五十年、五十一才にして殁する迄の二十二年間、文字通り日夜労作を怠らなかつた。バルザックの生い立ち及びその労作に費したこの世紀前半の時代こそは、革命につぐに革命をもつてし、戦乱と統治と、理想と現実との錯雑し混濁した